

知らぬ間に巨大組織のトップ3になっていた件について

ないものねだり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

友人達と別れ、流浪の商人を目指し村を出たりゼア。彼女はある日久方ぶりに友人と出会う。

とんでもないことをほざく、かつての友人に。

目次

プロローグ

とある商人の独白①

1

とある商人の独白②

5

とある商人の独白③

7

リリガリア独立運動

懸念

9

信念

13

疑念

16

理念

19

礎人形

21

プロローグ とある商人の独白①

この世界には、三つの巨大組織がある。

一つ。『聖伝』を全とし、それを元に作り上げられた教義を元に行動する《教会》。

一つ。『皇帝』を崇め、それをトップに厳正な階級制度を引く《帝国》。

そして——最後。

実態すら誰にも分からず、しかしその存在を誰もが否定出来ない《暗闇》。

それ以外にも、多種多様な大小の組織や国が存在するが、前述した二つの存在が半分近くの大地を席卷していることに相違はない。

さて、ここで誰もが不可思議に思うだろう。何故、『二つ』なのかと。三つの大きな組織があると言っていたではないかと。

それは、既に述べた通り『暗闇』には実体がないからだ。そう、どこの土地で暮らし、どのように生き、誰がトップで、どのような制度に基づいているのかすら不明な謎に包まれた存在。

それこそが『暗闇』である。
さて、ここで自己紹介。年齢二十二、性別女、名前はリゼア、苗字はソート。

『暗闇』と呼ばれる組織の、《第三席》をいただく、一介の商人である。

……まあ、私は嘘偽りのない、ただの商売人なのだが。



最初は子供の遊びだった。いや、私は今でも遊びのつもりである。と言うか、そう思わないとやってられない。

——私達はとある村の仲良し三人組であった。集まって、遊んで、夢を語り合った。仲違いして、喧嘩して、そして仲直りをした。

やがて、一人が妙なことを言い出した。

『組織をつくりたい。結構大きな。夢はビッグに、レッツ覇権』

元々、『世界を平和にしたい』とか真顔で言っていた娘だったから、あまり気にする事でもない。そう思ってその娘が適当に名付けた、これまた目的すら適当なグループ、『暗闇』の立ち上げに参加した。と言つても、私達三人だけの小さなお遊びみたいな物だった。……その時は。

その後少し話し合いをして、次の日には普通に遊び始めた。ちよつと遊びの内容も変わっていたが、十三になろうかという私はそう言うものか、と一人納得したのだった。

やがて、私達はバラバラになった。

『もう、個々人で活動する時期。あんまり会えなくなる。悲しい。でも、絆はフォーエバ……それじゃ、またね』

そう言つて、いつも集まっていた廃れ小屋から、リーダー格の娘はするつと消えた。それに追従するように、もう一人の娘も消えた。たった一日での出来事だ。中々個性的な友人達であったから、まあそんなもんかと納得した。

そうして、私は昔からの夢であった『世界を旅する商人』とやらを目指し始めた。

ふらりふらりと様々な国を訪問し、あんまり美味しくない焼き肉や微妙な風味の調味料を適当に売る。

これが続けていただけ。

まあいいかな、なんて思っていた。物珍しさからか、稼ぎはまあまあ。師匠的な存在もいるから最悪もカバー出来てる。共に旅する友人も出来た。

友人と言うよりも『用心棒』の意味合いが強いが、それでも友達は友達である。冗談を吐き合つて、たまにボードゲームをする。なかなか強い娘なので、私もやりがいがある。

余談だが、私はボードゲームが普通に好きだ。かなり好きと言って
も良いかもしれない。

戦術を考えるのが好きなのだ。定説、と言おうか。決まり切ったそ
れも楽しいのだが、自分で考えたそれが決まるのには極上の楽しさ
がある。

閑話休題

さて、こんな安定したようではない生活が続けて数年になろう
か、と言ったところだ。

とある国に留まろうと、宿を取った時である。コン、コンと窓から
音が鳴るではないか。

私はこれまた酷く驚いた。ホラー物は嫌いなのだ。本でも余り好
かない部類である。

しかし謎の負けん気があったのが幸いか、ビクビクしながら私は窓
へ向かった。カラカラと乾いた音を立てて窓を開く。

しかし、誰も居なかった。誰かの悪戯かと思いい下を向くと、おや、と
眉をひそめる。

ポツリと紙が置かれていた。風で飛びそうになりながらも、どうに
かそこに留まってパタパタと揺れている一枚の紙。

私は紙を取り上げ、微妙な顔をして——そして、目を見開いた。

『明日、昼過ぎ。誰も付けずに東漢通りの《卵楽亭》へ。目印は赤の
スカーフと緑の靴』

びつくりした。まあびつくりした。一人で来いとか、以外とお高い
《卵楽亭》を指定するところとか、そういうのを抜きにして。

なにせ紙には最後、こう書かれていたのだ。

『——絆はフォーエバ、フロム《暗闇》』

その頃は《暗闇》なんて誰も知らない組織で、私ですら忘れかけて
いたレベルの名前であったし、なによりこの独特な筆跡と語り口。私
が次の日、いの一番に卵楽亭へ向かったのも当然のことと言えよう。
ちよつと用心棒の娘から怪しまれながらも、なあなあで済ませ駆け
足で。

そして、私は久方ぶりに会ったのだ。

——とんでもないことをやらかしたとほざく、かつての友人に。

とある商人の独白②

『おひさ、リゼア』

そう声が掛けられたことを、今でも思いだせる。かつてと変わらぬ死んだようにのっぺりとした白銀の瞳に、スカーフの上でゆらゆらと揺れる黒色の髪。

レーラである。私達の中で一番突拍子のない行動をしていた、かのレーラである。

私は満面の笑みで迎えた。無下にする理由など無い。溢れんばかりの歓迎の意を持って、挨拶をする。

そうして、しばらくは昔話に花を咲かせた。

しかし、風向きが変わったのはその数十分後。無駄に卵を使いまくった食事に、少し飽き飽きしていた頃だ。

もしかしたらそんな私の顔を見て、『そうだ、刺激的な話をしよう』と彼女が気を利かせてくれたのかもしれない。そんな配慮はいらないと、今なら胸を張って言える。

彼女は、世間話のノリでポツリと言った。

『近々、帝国から《暗闇》当ての手配書が出される。今のところ、《そう言う名前である》と言うことしか割れてない。けど、念の為活動を抑える。』

水面下で用意はするけど、目に見える活動はしない。よろしく』

『は？』である。紛うことなき『は？』であった。

数秒笑顔で停止して、ぎこちない動きで軽く頭を動かす。しばらくして、納得した。

なるほど、レーラも久方ぶりの再会で緊張して下手な冗句を言ってしまったのだ。

そして、凍り付いた笑顔で口を開こうとすると、レーラはちよつと早口で語り始めた。何故か分からないが、焦っているようだ。表情が変わっていないので分かり辛いし、あまりにも微細な違いだが、これ

は焦っている時の反応だ。

無駄にレーラについて知っている私は、そう考えながら長々と話を聞いていた。

『——違う。安心して、リゼア。これは転機。私達の素性も、名前も割れることはない。そこはシトラが保証してくれた。』

だから、寧ろ今回は名前を売れたことを喜ぶべき。逆にそれを利用する方法も——』

既にこのあたりから私は頭がポカーンとなっていた。勿論、顔は笑顔のままだ。これは商人として大事なスキルであると師匠から口酸っぱく言われていたので、どうにか意地で保っていた。

だがしかし。長々と語られても、思考を停止した私に何か入ってくるわけもなく。

やがて、『——だから、大丈夫』と自信満々に言い切るレーラに、私は笑顔で頷くことしか出来なかった。

そして、一応レーラの連絡先を貰い、うつらうつらとした頭で宿に戻る。用心棒の娘にちよつと心配されながらも、私はベッドに突っ伏した。

しばらく放心し、出した結論は一つ。

『これは全てレーラの妄想である』

そう考えると頭が楽になった。翌日には全てをさっぱり忘れていた。

——一ヶ月ほど後、用心棒の娘が『そう言えば、帝国から新たに指名手配された組織がいるらしいですね』、と言われるまでは。

とある商人の独白③

そこからはとんとん拍子である。半年後には、教会の元締めである教国から《異端》として全世界へ通達された。

これも用心棒の娘——セアが持つてきてくれた確度の高い情報である。そう言う事に関して、それなりの期間雇われ商売をしていたセアの情報は信用出来る。笑うことしか出来なかった。

しかし、本来ならこう言う組織は大体数年経てば手配書などからも消えるのが当たり前である。あの《教会》と《帝国》から目の敵にされ、存続できる組織などいるはずがない。

だが、数年経つても《暗闇》の名前は消えることはなかった。むしろ、無駄に巨大化していた。

《暗闇》が帝国の研究所を破壊したとか、教会の神器を奪ったとか、とんでもない話が舞い散っていた。

そして決まってそう言う話は、それが明らかになる前に、それなりの頻度で会うようになっていたレーラとシトラから報されていたから、もう《暗闇》の話は信じるしかなかった。

そして、二十を過ぎた頃、理解した。もうどうしようもないのだと。

——そして、今。目の前に片膝を付き、淡々と報告書を読み上げる黒装束を見遣る。

「——以上が、連邦政府を設立する流れです。では、この計画に異議が無ければ、こちらにサインを」

「ああ……うん、分かったよ」

取り出すのは、本来なら商談に使う羽ペンだ。これを買うのは結構な出費だったが、私は気に入っている。

なめらかな書き心地はやはり良い物だ。現実逃避しながらつらつらと語る。

「なるほどね。やはり実質的な支配地は必要だろう。ちなみに……レーラは承諾したのかい？」

思ってもないことを述べる。いつの間にか私は組織の第三席とや

らになっていた。重要な決定には私のサインが必要らしく、今ではこう言う者が秘かに私の元に来るのが当たり前。

お陰で、レーラが何をしてようとしているのかなんとなく分かるようになってしまった。あることないこと言って、どうにかぼく見せるのも慣れたものである。

「は、これは《二席》様発案のようでして、レーラ様も承諾はされております……一応お伝えしておく、レーラ様はあまり良い顔はされておられなかった、とだけ」

「まあ、レーラはね……とことん危険を嫌うから、気持ちは分からないでもないさ。

……それじゃあ、もう良いよ。私も個人的な用事あるんだ」

「——承知致しました」

黒服君は滲むように消えた。毎度違う人が来るのだが、どうやら様子を見るに彼ら黒服君達はレーラの管轄のようである。

なんか状況にピリピリとした怪しい雰囲気を感じるが、そもそも私は部下も目的もない完全な巻き込まれ人である。何を求められても困る。

ため息を付くと、扉がキィと鳴る。光が目に入った。思わず目を掌で覆う。

「リゼアさん、食事出来たそうですよ」

セアであった。澄んだ宝石のような声に、ハツとするような蒼髪。小柄な体は、麗人と言うより幼い令嬢と言った方がピンとくる人も多いだろう。

ちなみに申し訳ないやら怖いやらで、《暗闇》の事実を伝えていないのが無駄に罪悪感なのが最近の悩みである。

「……ああ、うん。ありがとう、今行くよ」

微妙に申し訳なく、ぎこちない笑みを見せながら、私はゆつくりと椅子から立ち上がった。

リリガリア独立運動

懸念

「それでなんですが……ここはどうですか？」

「ん、ああ。まあ、数日程度の所感だけど、やっぱり人の出入りが多いね」

カチャカチャと言う音は、食器とフォークがたてる音。目の前のセアは既に食べ終わってしまったようで、こちらを見遣りながら時折銀の杯に注がれた水に手を伸ばしていた。

今滞在している町、リリガリア。

名目上帝国の交易都市として発展したここは、広漠の国と呼ばれるエルと接する故に少々特殊な場所である。

要するに、エルの人々が帝国へ入る出入口の役割を果たしているのだ。

さて、そんなリリガリアでしばらく売りに入ろうと思っていたのだが……ちよつと問題が発生した。

「売り上げはどうです？」

「結構良いよ。ここ数日で数ヶ月分は入った。他へ卸すことも考えたら、次の場所への旅費と宿代には充分以上だろう。」

今日の夜はちよつと贅沢しようか。良いところを取ってるから、楽しみにしといてくれ」

「良いじゃないですか！では、しばらくここに滞在するので問題ない感じですね！」

「あー、それなんだけどね……」

口をもごもごと言い淀める。宿の配膳人を横目で眺めながら時間を稼ぐ。

懸念点はある。と言うか、懸念点しかない。

先ほど報告された《暗闇》の計画案。連邦政府を樹立する、と言う趣旨の物だが、これの一案に『リリガリアの独立』が入り込んでいたのだ。

計画を聞き流していたところでリリガリアという名前だけ耳に入り、慌てて真面目に聞き始めたのでほとんど何も分かっていない。どうにか前述の内容だけ読み取ったのが限界であった。

いつそれを行うのかすら分からない。誰がどのようにそれをするのかすら分からない。

リリガリアの特殊性や成り立ちを鑑みれば、多少のやりようは予想出来るが、もしそうなることんでもない混乱がここに巻き起こる事になる。……黒服に言われた事が頭によぎった。確かに、レーラはこの計画を嫌うだろう。

そうして、一通り回想した後、私はこの計画の立案者を思った。金色が舞い散る満面の笑みを幻視する。自信満々の高笑いを幻聴する。

……なんてことをしてくれてるんだ、シトラ。

「なにか懸念点でも？」

「いや」

怪訝そうな青色の瞳が目に入る。セアが不思議そうに首を傾げる。周りのざわざわという雑踏が鼓膜に響く。

こう言うしかないではないか。恨むぞ、シトラ。そして私は笑顔を作り、言った。

「……懸念点なんて、これっぽっちもないさ」



「いいませんか、東欧の国、トーラの素材たっぷりの調味料ですよー」

適当な声掛けを喉から絞り出す。ちなみに、トーラとは紫色のヤバい色した虫の事である。私を取り扱う商品の中でも特別ヤバいやつだ。

お蔭様で、予め商品を卸す予定だった小売店の方々はこれだけは止めてくれと懇願された。本来なら説明すらしたくなかったが、しないのは説明義務に反する。大陸全土で定められた規定には従わねばな

らない。

まあ、物珍しいと言つてもこのレベルになると『珍しい』なんて言つて買つてる場合じゃなくなるのだろう。買われないのも当然のことと言えた。と言うか、私も説明するまでもなく取り下げたかつたレベルなのだ。

にしても、と辺りを見渡す。煌々と太陽が大地を照らしているそこに、行き交う人々。

そこをめぼしい場所と見たのだろう。私と同じような商人……いや、売れ残りをわざわざ直接売る商人なんかいないか。

まあ、つまりは店の人々が売りをしていたのだ。

「さあ寄つた寄つた！今が旬のノノレア鳥の蒸し焼きだよ！」

「新鮮な春野菜！ここでは珍しい、トウトク草もあるよ!!」

声を張り上げ、身振り手振り。正直なところ、私はあんな感じのが『商人』だと思つていた時期があつた。

しかし、実際のところ儲かる商人とはほとんど買い手と話をしない物だ。特に、『流浪の商人』なんかを目指そうとすれば尚更だつた。

なにせ、ああゆう生き方が成り立つのは地域と密着しているからに他ならない。信用も実績も、なにより安全もなさそうな私の売店で物など、到底売れる訳がなかった。

隣に立つセアが組んでいた腕をだらりと下げ、腰の剣に手を掛けながら左右を見渡す。

ちよつと脅しているように見えなくもない。うちの店の前だけ人足が速くなつた。

脅しているな、これ。

「……売れませんか」

「私からすれば、これで売れたら驚きかな」

「むむ」

「売れなくていいんだよ。そもそもうちは、現状金自体には困つてないんだし」

難しそうに顔をしかめるセア。この子、見た目は良いのだが、余りにも物騒過ぎて売り子は出来ない。

昔やりたいと言い出したので、売店を任せてみたのだが、目を離した際に剣を取り出しズバンと一撃。

セア曰く、『殺気を感じたので』らしいが……それで買い手に斬りかかったら苦勞しない。頬と服に傷を負った男は、逃げるように帰って行った。

懐かしいな、またやりそうで怖いな、なんて思っていたら、セアはこちらを向いてポツリ。

「……そう言うものですか？」

「そう言うもんだよ」

そもそも売れたら困るのだ。

これ、食べられるだけで火薬なのだし。

信念

売れない調味料をしばらく売りに出してみたところ、やはり売れない物は売れないのだと結論した。もう日も暮れそうである。諦め時だろう。

やはり紫色はダメだったのだろうか。売れても困ると言ったが、少しは売れてくれたら嬉しかったのだが。

もう二度とトラ虫なんぞ仕入れんぞと言う決意と共にため息を付き、店仕舞をしようと――

「――一つ！貰えるかしら!!」

カチャリ、と隣で音がした。セアが臨戦態勢へと入ったのだ。

いや、それは良い。まだそれは良いのだ。

なによりも問題なのは、この声に聞き覚えしかないことである。自信に満ち溢れた声には、己を絶対と信じて疑わない者特有のそれが充足していた。

ゆつくりと、店仕舞の為に下げている顔を上げ、目の前を捉える。目に入ったのは予想していた通りの存在。

「……シトラ」

「知り合いですか？」

セアの呟きに小さく頷く。相変わらず、目立ちすぎる友人だ。

私達三人の中で最も突拍子がないのがレーラであるとするれば、私達の中で最も目立たないのが彼女である。

爛々と煌めくは金色の輝き。溢れんばかりのその自信は、かつてと変わらぬ眩しさを放っていた。

「奇遇ね、リゼア！久しぶりだわ!!」

奇妙な事に、周りの人間には欠片も注目されていなかった。彼女の放つ、いかんせん常人とは言い難いそのオーラにしてはあり得ない事である。

だが、今はそんなことをセアに説明している場合ではない。

「奇遇だね、シトラ……それじゃあ、場所を移そうか？」

「ええ！異論はないわ!!」

『リリガリアの独立』。シトラがここに来た事にはこれが関係しているであろう。ならば話を聞かなければならない。そう考えた私はそのそと、だが確かに動き出した。



「——では、ごゆっくりお過ごし下さい」

「うん、ありがとう」

ウェイターは軽く一礼。カツカツと言う音をたてて姿を消す。それを見届けると、シトラがニコニコとした笑みで私に向いた。

「良い店ね!! 広いし、綺麗だわ!!」

「ここはそれなりにするからね。まあ、君からすれば余り高くないかも知れないけど」

「あら?! 心外よ!! 確かにお金はあるけどね!! そういうことじゃないの! 私『皆』の視点に立ちたいのよ!!」

セアが凄い顔をしてシトラを見ているが、それも頷ける。なにせ、ここは高級料理店。

エルの特産品と帝国の豊かさが相まり出来た、かなり評価の高い店だ。勿論そんな店なのだから、ここで大声で騒ぐ人は嫌な顔をされて当たり前。なんなら摘まみ出されて然るべきである。

だが、シトラは違う。なんせ、彼女は特別なものだから。

「うん、セア。一応説明しておく、シトラは『加護』持ちだよ」

「そうね!! 与えてくれた偶然と運命に、私は感謝しているわ!」

「ああ……なるほどです」

ちなみに、感謝しているとの事だが、本心からならシトラは相当な極善人である。かなりこの加護に困らされてきたからだ。

さて、見れば一目瞭然であるが、この加護の特質すべきは『気付かない』ことである。勿論こんな大層な賜物、なんの訓練も受けていない一個人がまっとうに制御出来るわけがない。

故に彼女は私達と会うまではほとんどコミュニケーションという物をとったことがなかったらしい。今はこんなんだが、初期はなかなか

か扱いに困った物だった。今はこんなんだが。

そこで、セアが薄い警戒心を滾らせている事に気が付く。

「あー、そんなに警戒する必要はないよ、セア」

「そうね!!だって私、とんでもない運動オンチなんだから!!」

「……ええ?なんか警戒してる本人から言われるとアレですね、違和感です」

「そうかしら!私は私を嫌いじゃないわ!!だから、自分を隠すなんてしたくないの!!」

「なんか眩しいです、この人」

相も変わらぬ素晴らしき前向き思考であった。掌で目を隠すセアも、特段嫌な雰囲気は見えない。

こう言うところが、私がシトラを好きなどころでもあるのだが……さてはて。しかし、話が進まない。取りあえず、目下やるべきは一つだろう。

視線を下へ移す。

「そろそろ食事、始めようか」

早くしないと冷めてしまう。私は湯気を立てる食事を前に、ゆつくりと手を合わせた。

疑念

食事を終え、先に食べ終わっていた二人を横目で眺める。

今、シトラが表向きに傭兵事業の展開を行なっていることもあつてだろうか。セアの傭兵時代の辛み悩みを肴に、酒を傾けながら談笑していた。

する事もないので軽く見ながら私も杯を傾けていると、見ていることに気が付いたのか、談笑最中のシトラがこちらを突然向き直る。次の瞬間、にこにこした笑みで立ち上がった。椅子がずれ、カタンと音が鳴る。

「こつちのリーダー、それですね、なんとも言うてきたんです。

『デメエら——』

それと同時に。饒舌に話していたはずのセアが突然口をつぐむ。瞳がブレる。異常を感じた私は、すぐに立ち上がるとセアの近くに駆け寄った。

「セア、セア……聞こえているのか？セア？」

目の前で手を振ってみる。無視。ぼんやりとした瞳がクラクラと揺れ、やがて一点を見詰める。

その青に理性が灯ったのを感じ、再び声を掛けた。

「セア、何を——」

そして、一瞬の間。流れるようだった。椅子を引くと、彼女は止める間もなくカツカツと足音を立てて出口へと向かう。出口にいた店員は頭を下げてそれを見送った。

支払いは終えているから、確かにそれに間違いはない、ないが——
悟る。

「——シトラ」

「ええそうね！ 申し訳なく思うわ!! 加護の範囲を貴女まで拡張したの!! 一時だけどね! でも、安心して欲しいわ!!」

「……何を安心しろと」

「聞きたいことがあるのでしょうか?! そしてあの娘は『無関係』なのよね!! なら! それならよ!! 捲き込むのは不義理に当たるわ!!」

「……む」

……良く考えると、そうである。頭が冷えた。

咄嗟の対応は苦手なのだ。要するに、余りにもこちらが考え無しだったので、シトラが配慮してくれたわけである。

「ありがとう、助かったよ」

「そうね！ 自分の非を認めて素直に感謝できるのは貴女の美点よ!! 誇りなさい!!」

「だけどね！ ちょっと疑問があるの!!」

なんであろうか。談笑で溢れるこの場所で話すに適切な質問なら何でも答えよう。いや、私を加護に『含めた』のだったか。

なら、先程の無礼を兼ねて何でも答えようではないか。

そう意気込んでいたところ、不可思議な問が投げかけられた。

「——貴女、ちよつとレーラに不義理かもしれないわね!!」

初めてセアとあったのだけど、話を聞いてると相当な時間あの娘と過ごしてるみたいじゃない!!しかも、何も知らせずに!!そんなにあの娘は大切かしら?!」

「……んん？ そう、だね？ 私とセアはそれなりの期間一緒に行動しているよ。」

それに、セアは勿論大切だ。知らせてないのは……そう、いつか知らせるつもりだよ」

『レーラに不義理』とは、これいかに。まあそれは置いておいて、セアに知らせてないことは罪悪感でしかないのだが。いつか、時が来れば話すつもりである。そう、一度別れるときとかどうだろうか。なかなか驚いてくれそうである。

そんな想像をしながら答えると、シトラは快活に反応する。

「余計なお世話ってやつかしら！ 分かったわ!! 不必要な事で他人の旅路に手を加えるのは、私の道理に反するの!! この件はこれでおしまいね!!」

「うん、よろしく頼むよ」

「了解したわ!!」

一区切り。だが、シトラは止まることはなかった。こちらへ促すよ

うに視線を向ける。

なら、それに乗らせて貰う。シトラを捉え、ゆつくりと口を開く。

「今度は、こつちから質問させてもらおうかな、シトラ。君は一体、なんの為にここに来た？」

「それは、既に知らせを知ってて言ってるのよね!!」

「……ん、そうだね。だけど、一応の確認の為に聞いてるだけだから、そこまで深く考えなくてくれるとありがたいかな」

キラキラとした笑顔で言われると、まさか『聞いてない』なんて言えない。

そして、シトラは『それならいいわ!!』と言うと、バツと手を広げて叫んだ。

「——明日午後のリリガリア独立!! その為のお膳立てを、私には来たのよ!!」

理念

「……なるほど、ね」

乾いた声しか出なかった。とめどない焦りが湧き出る感覚に、逆に口元が弧を描く。

感情を抑えるように腕を組むと、真っ正面からシトラを見据える。

「明日が転換点よ！ 変えるの!! 《帝国》と《教会》に支配され凝り固まった世界を!!」

「それは……レーラの考えと……」

『違うのではないか』。シトラが言う言葉に違和感を感じる。薄々感づいていた事だが、出来るなら否定したかった。

私が理解していたのは、世界の変革などではない。連邦政府を樹立することにより、体面上《帝国》と《教国》と《連邦》で三竦みにまで持ち込む。そうすることで、これまでの帝国と教会の覇権争いはなりを潜め、世界は安定する。

これがレーラの考えであつたはずだ。もう逃げてなどいられないだろう。レーラとシトラの対立。ならば、私が信じる方は決まっていた。しっかりと前を向き、そして一瞬息を呑む。

シトラが爛々と輝く瞳で私を見詰めていた。どこか強い覚悟を感じさせる瞳で、彼女は私を捉える。

「そうね!! レーラには申し訳ないわ! 重ねて、貴女にも本当に申し訳ないと思つているわ!! けどね!」

シトラが声を高々と鳴らし、そして私が身構えた、その瞬間だった。

——途轍もない爆音が耳を打ち付ける。バゴンとも、ドガンとも捉えられる、大きな大きな音。

一瞬遅れてガラスが割れた。風が吹き抜ける。大地が揺れる。

席に座つていた十数人の人間達は目を丸くし、だがやはりここに座る程まで財を貯め込んだ者達だ。すぐに席を立ち上がると荷物をまとめ始めた。

そして駆け込んできたのは黒いタキシードを纏った初老の男。慌てた様子で声を張り上げる。

「——お客様方！ 一旦この場所からの待避をお願い致します!!
どうやら霹路通り辺りが爆発の中心との情報です!」

近い。霹路通りと言えば、この店から徒歩15分も要らないだろう位置だ。

そして、その通りには聞き覚えがあつた。何を隠そう、私とセアが今現在止まっている宿屋《ミリト》が存在している場所である。

迅速に待避する客達に、無視される私達。

これからどうするのか。シトラは関係があるのか。先程の話しを聞いていた私は軽く疑いの念を込めてチラリとシトラを見る。

シトラは無言で、文字通り開いた窓から見える、もくもくと立つ紫煙を注視していた。

「……シトラ、霹路通りにはセアが今いるはずだ。私はセアの安全を確認したい」

「そうね! それと謝っておくわ!!」

返答はすぐだった。先程よりもなお色の強い赤色をその瞳に宿し、シトラは私を見遣り、そして手を振り上げる。

一瞬の停滞。余りにも突然の発言に意図を掴みかねる。何をすることもりなのか。それを問おうとし、そしてシトラは叫ぶように宣言した。

「本当にごめんなさいね、リゼア!! ——死んで貰うわ! 今、ここで!!」

そしてシトラは。目を大きく見開く私を無視し、息を吸うと——手を振り下ろした。

磔人形

ブンツ、と勢い良く手が振り下ろされる。

爛々と燦めく瞳が私を貫く。そして——そして——、

「……んん?」

「……あ、あら?! おかしいわね! なんでかしら、トウボク!!」

——そして、いつの間にかソレは彼女の隣にいた。

存在感を感じさせない、その足取り。人として鍛え上げられる技術、その頂点に立つであろうそれが、足取り一つでこうも分かるものか。

コツコツと音を鳴らして止まったのは、白髭を垂らした老人であった。彼はゆっくりと辺りを見渡すと、不思議そうに首を傾げる。

「……はて、申し上げにくいのですが……主殿。恐らくですが先ほどのやり取りからして、御友人殿の加護の切り忘れかと存じますな。

私の目には、御友人殿のお姿が欠片も映っておりません」

「……忘れてたわ!! ごめんなさいね!! トウボク!!」

どうにも抜けているところがある。それも魅力ではあるのだが……今回ばかりは彼女にとっての大失敗。そして私に取っては途轍もないチャンスだ。

だが、そもそも戦闘になるなんて思ってもみなかったから、大した物は持つてきてない。咄嗟に手持ちに思考を巡らせ、そしてある物に突き当たった。

「それじゃあ、解くわよ! さよならね! リゼア!!」

手をかざされる。トウボクの視線がこちらを見据える。そして、時間がないと悟った私は、後先考えず後ろ手に握った物を、思いっきり投げつけた。

パリンとガラスが割れ、そして紫に染まった粉末が撒き散らされる。

次の瞬間、目の前に刃があった。

地面から粉末が沸き立つ。白銀に染まった鋭い刃が、研ぎ澄まされた闘気に濡れた瞳が私を貫き――、

「頼んだわよ――っ!!?」

「――これは」

トウボクの表情が驚いたようなそれに代わり、シトラが息を呑む。躊躇ったように剣速が鈍る。

異様な粉末に、シトラを助けるか私を切るか迷ったのだろう。出来れば前者を選んでくれと強く願う。

「――トウボク!! 私は無視しなさい!!」

そして、響いたそれに一番驚いたのは私だった。

「――承知致しました」

首元に刃が迫る。走馬灯が駆け巡ろうとする。そして、私は――バキン、と胸に忍ばせていた何かが壊れたのを悟った。

「……おや、おかしいですな。確かに手応えは……」

目の前で、何度か剣を確かめるように握るトウボク。それに私は苦笑いをした。

「は、はは。出来ればそれで我慢してくれると助かるかな」

戦闘能力が皆無の私には、それしか出来ることがない。アレで最初で最後の一つなのだ。

地面にポトリと、首の部分が断ち切られた、汚れきった小柄な人形が落ちる。

師匠曰く、『商人なら常に一つは忍ばせていろ』とのお言葉を貰った、『身代わりくん』だ。『身代わりちゃん』『バージョンもあるぞ』らしいが、それは外見の問題でしかないのではなからうかと思っただ。だ。

ついでに、そんな別バージョンを作るくらいなら命名か見た目をどうにかしろと思っただのは一度や二度ではない。

だが、これに命を救われたのは確かだ。次会ったらお礼を言っておこう、なんて考えながら、思わず安堵のため息をつく。

それを見て、シトラは激昂するように目を見開いた。

「まだそんな悪趣味な物を——トウボク!! それは《磔人形》よ!!」
「……なるほど、やはりあのリゼア殿ですな」

『あの』ってなんだあのって。いくら私でもそれが良い意味で使われていないことくらいは悟れる。

いつの間にかついていた尻餅を立て直そうと、汚れを払いながら立ち上がる。そして、ふと耳に付いた言葉に反論した。こう言う場では、時間稼ぎが大事なのだ。

「シトラ、確かにこの名前は論外も良いところだけど、呼び名を変えらるだなんて失礼だ。いや、私もどうかと思っただが……それでも名前一つにもいろいろ試行錯誤があるんだ。

そしてこれは《身代わりくん》だよ。師匠が頑張って開発したんだ。見栄えは良くないかもしれないけど、悪趣味は言い過ぎじゃないか。

……ああ、ちなみに別バージョンで《身代わりちゃん》もあるらしいね」

「……………そうね！ 貴女はそう言うわよね!! だから、貴女には死んで貰うわ!!」

だからってなんだ、だからって。

そろそろ反論も受け入れてくれそうにない。諸々を超越した論法で殺しにかかってきそうな有様である。

そして、私の目の前でトウボクが再び刃を握ろうとしたその瞬間。ボツ、と。何かが何かに着火するような音が鳴り——。

「——主殿!!」

——世界に、紫色の焰が灯った。